旅鳥逍遥　４.アジア 編

YUWV九州支部　　加 藤 征 治(文理、S41年卒)

アジア編は、中国・香港・マカオ、韓国、(日本)、台湾、東南アジア(ベェトナム、カンボジア、タイ、マレーシア、シンガポール)、スリランカ、ネパールの11ケ国である。

中国（中華人民共和国）

中国は世界遺産の数56は、イタリア(58)に続いて２位である。ただ、そのうち14が自然遺産で一番多い。中国訪問のきっかけは、中国の大学医学部からの研究留学生（大学院・研究生）の受け入れから始り、多くは研究交流による大学訪問によるものであるが、リタイヤ後はツアー参加もある。

中国大陸のほんの一部、北のハルピン、北京、石家荘と南の上海、曲阜、済南、蘇州、無錫、武漢の９都市である。ハルピンは中国では東北（河北省）・旧満州に相当する審陽や長春のさらに北の美しい都市である。

最初の訪問はハルピン医科大学からの招聘講演であり、大学に着くなり驚いたのは解剖学教研室での人体標本のお出迎えである（図１）。

図１　ハルピン医科大学正門、大学解剖学教研室*の歓迎（中国では*○○教室でなく、大学の教育と研究を示す“教研室”名に感銘！）

町を流れる松花江河は、夏期はクルージングで河渡りできるが、凍てつく厳冬期は戦車も通れる厚い氷で覆われ、氷祭りが盛んだとか。いずれも春・夏の訪問であったので、次回は冬にとの誘いであったが、ちょっと躊躇する。ハルピンへの空路は最初の訪問では新潟からの約２時間少々のフライトで行けたが、後年はその航路は閉鎖され、２度目の訪問（大学創立90周年記念祝賀会など）からは空路北京経由である。

首都北京は最近大気汚染などで環境問題が注目されているが、さすがに皇帝の威光を象徴する絢爛豪華な宮殿・紫禁城と呼ばれる北京の故宮（図２）など

明・清時代の政治の中枢となった宮廷建築群・『北京と瀋陽の故宮』（世界文化遺産）は人気である。

図２　北京の故宮

中国は世界遺産は比較的自然遺産や複合遺産が多い。北京市内には文化遺産として西太后が愛した清王朝を代表する宮廷庭園の『頤和園』（図３）がある。この広大な庭園は 12 世紀半、清王朝第６代の乾隆帝が離宮として整備した。周囲に多くの建物が残っているが、現在は一般に開放され、市民の憩いの場となっている。また、明・清両王朝の皇帝が天を祀り五穀豊穣を祈った場である円錐形の塔・『天壇』など人気である。

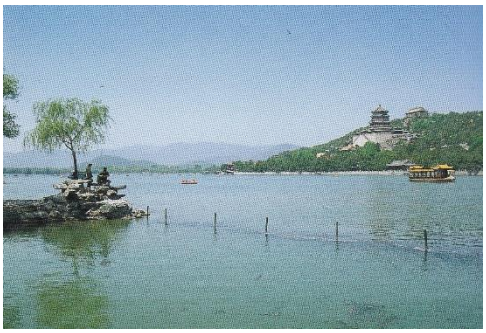

図３　北京の頤和園

中国で上記世界遺産の話となれば、誰もが真っ先に挙げるのが『万里の長城』（図４）であろう。紀元前 221 年、中国を統一した秦の始皇帝は、北方の遊牧民への防御を強化するため、戦国時代に造られた長城を修復・連結した。その後、漢の武帝や歴代の王朝も修造・増築を繰り返した。この長城の頂上を極めるには大変な行程であるが、近年は観光地化が進み、ロープウェイの設備も整っている。

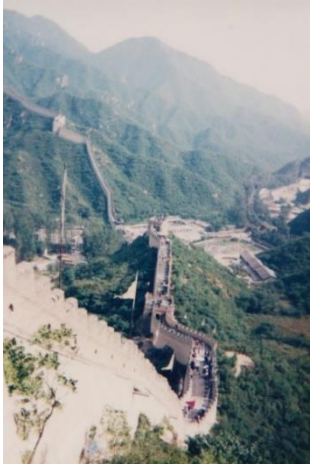

図４　万里の長城の頂上の眺望と記念切手

北京と同じ華北に石家荘という都市がある。1937 年に日本軍が進駐・占領した軍事拠点であったところである。たまたま大学医学部の研究留学生受け入れ・学術交流で訪問する機会があり、二度ほど北京より車で約４時間の距離を同僚と同乗し訪問した。訪問の帰路、

図５　皇帝の陵墓・清西陵

比較的北京に近いところで、明・清時代の皇帝が眠る『明、清の皇帝陵墓』（世界文化遺産）１つ、明朝の歴代の皇帝 13 名が埋葬されている明十三稜や清西陵（第 12 代の親の墓、図５）へ立ち寄った。立ち寄ると言ってもただのお墓参りと違い、広大な敷地を長時間歩くのは「もう勘弁して！」と言うのが正直なところであった。

石家荘からさらに黄河下流南の華中の済南は山東省の省都であり、そこの山東大学との研究交流から、初めて医学部を訪ねた。そこで“熱烈歓迎”を受け、リンパ形態学に関する講演会を企画してくれた（図６）。当時たまたま当大学に新型の電子顕微鏡が購入・設置されたというタイミングで、有難いことに筆者の口演は盛り上がった。

図６　山東大学（医学部）の正門と口演風景、
左上は口演最後のスライド、下は大学の“熱烈歓迎”の看板

済南市内には、済南 72 泉の第１泉の勺突泉公園（図７）があり、地下の鍾乳洞から水が湧き出ている。建物の彫り物のある大理石の石柱がすばらしい。

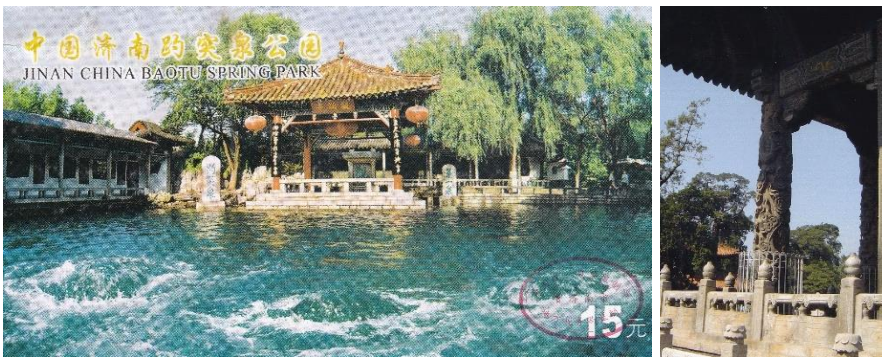

図 7 済南市内の勺突泉公園,
公園の池ではいつも多量の水が湧き出ている。

済南の近くで道教の総本山で多くの文化墨客に愛される聖山・『泰山』(1,545m)（世界複合遺産）（図８）がある。たまたま、済南大学を訪問中、山の話になり、済南付近に古来有名な泰山と言う山があるから、「それでは明日その名山・泰山を案内しよう」と言うことになり、岩絶壁を縫って頂上まで 7000 段の石段があるとも知らず無謀にも出かけた。さすがに歴史ある大国中

国、秦の始皇帝など歴代の皇帝が、不老不死を願い山麓で血の神を祀った聖山である。（(OB 通信鳳翩 2020,6.エッセイ閑話二題で報告)。現代は文明の利器・ロープウェイが途中まであり、少しは助かった。

図８　済南の聖山『泰山』に登る。壮観な絶頂は「五岳独尊」とも言われる。

泰山から少し南に、儒聖孔子生誕ゆかりの地・曲阜に孔子を祀る孔子廟、孔子一族の墓所の孔林（図９）私邸・役所の孔府（『曲阜の孔廟、孔林、孔府』、世界文化遺産）ある。歴代の皇帝が守り続けた儒学の祖孔子の廟と墓と子孫の住まいである。

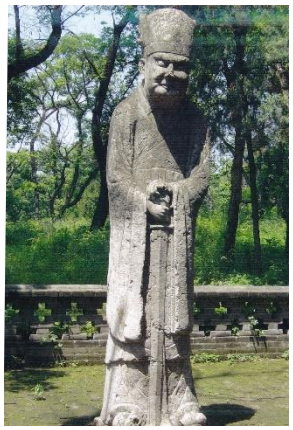

図９　孔林にある孔子の墓（左）と孔子像（右）

なお、曲阜（きょうくふ）の阜の字について、岐阜県の阜の字は、戦国・織田信長の時代、中国・曲阜（きょうくふ）が由来とされている。

無錫の街を歩いていて、朝お寺の境内で書をする人達をよく見かける。書と言っても墨で紙に書くのではなく、敷石にホオキのような太い筆に水を付けて書くのである（図 10)。水で書くと言っても、ただの落書きではなく、思わず立ち止まり見とれるような素晴らしい出来栄えのものである。朝の日照りと共に消えていくのがもったいない。中国を旅するとどの都市の街中でもよく見かける風景である。先年北のハルピンではバケツ水をはって持ち歩いていたが、ここ無錫ではスマートに、ペットボトルを持ち、筆筒に水を入れて書いている。素晴らしいアイデア、進歩であろう。

図 10 街角の路上書（ハルピンと曲阜）

長江の河口の東シナ海に臨む上海は中国の空路・海路の玄関口で、広い中国で一部の旅もその起点となっている。上海へは上海カニを食べたぐらいで、北の北京・石家庄、近くは蘇州、無錫そして西の武漢への経路として立ち寄るくらいで、市内観光の機会は少ない。

上海からバスで２時間足らずにある蘇州は水の都つまり白壁の民家を縫って流れる水路・運河が町を取り囲んでおり、マルコ・ポーロが「東洋のベニス」とたたえたと言われている。宋時代（10-13 世紀）以降に情緒あふれる古典庭園が多く造られ、それら名園群『蘇州の古典庭園』（世界文化遺産）のうち拙政園は造園芸術の傑作と言われている。また、当の詩人張継が詠んだ「楓橋夜泊」でおなじみの寒山寺（図 11）もある。寒山寺は、昭和 15 年（1940）に作詞・作曲され戦後も歌われた「蘇州夜曲」の歌詞三番「鐘が鳴ります寒山寺」と出てくる。

図 11 蘇州の寒山寺（左）と張継の「楓橋夜泊」の詩書（筆者拙筆）

長江（揚子江）の上流西岸の内陸の武漢は華中の最大都市・湖北省の省都である。長江南岸の蛇山にそびえる美しい五層の黄鶴桜は名楼閣の１つとされている。「昔ここにあった酒屋に仙人が壁に黄色い鶴を描いたところ、店は大繁盛し、仙人は鶴に乗って飛び去った後に店主がここに楼閣を立てた」（ガイド談）。50m 近い高さの主桜から武漢市街と雄大な武漢長江大橋が眼下に見られる（図 12）。

図 12　武漢・黄鶴楼（上左）、ガラスにレーザーで彫刻された黄鶴楼（記念品）、主楼からの市内眺望（大河長江と大橋）（下）

香港・マカオ

香港・マカオは３泊５日の弾丸ツアー旅である。香港もマカオも共に現在中国（中華人民共和国）の特別行政区である。同じ行政区でも香港は香港ドル、マカオはマカオパタカと通貨が異なるので、少し不便である。もう１つ、公用語は共に広東語であるが、現地では香港は英語、マカオはポルトガル語と異なる。マカオはポルトガルの大航海時代（16 世紀）から東方貿易の拠点として栄えた名残がある。歴史地区（聖ポール天主堂など）『マカオ歴史地区』（世界文化遺産）がある。以下、香港のツアーの写真である（図 13）。

図 13　香港の都市（上）、香港の港の昼と夜（下）

台湾

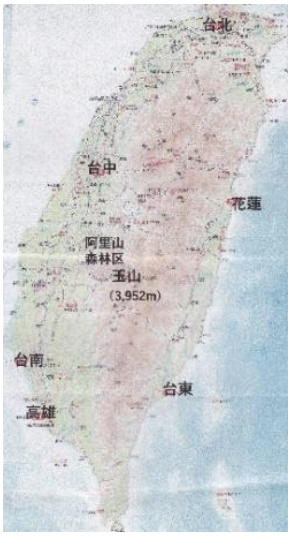

図 14 台湾周遊図

台湾は東アジアの島（金門島、馬祖島）および台湾本島を中心とした地域の名前である（Wikipedia）。本島（図 14）は南北に長く、西は台湾海峡を挟んで中国と、南はバーシー海峡を挟んでフィリピンと、東は太平洋に面している。台湾は台北部、台中西部、台南西部、台東部の４区される。

台北では何と言っても、国立故宮博物館（台湾）である。本編（P. １、図２）の北京・紫禁城の故宮（国立故宮博物館北京）にも歴代の皇帝の多数の美術品・収蔵品がある。

台北の故宮の所蔵品は北京の故宮のそれらと比べて量はともかく質的には優れていると言われている。展示館内はいつも大変な人出で、明から有名な彫刻（翠玉白菜や小舟など）や書画（王義之など）は人気で、二度の拝観とも大行列であった。台北で比較的日本観光客にも親しまれている九份（きゅうふん）と言う坂道や階段の多い小さな町がある。台湾の「悲情城市」という映画の撮影に使われてことでそのレトロの風情が人気である。

台湾を反時計回りに向かい、台中では宝覚寺に黄金に輝く大きな大仏像（図 15）がある。この大仏の笑みは穏やかで、見るこちらまで思わず微笑んでしまう。

図 15 宝覚寺の黄色に輝く大仏

台中の内陸部で台湾八景の１つ日月潭（ダム湖）に面した文武廟へ立ち寄った。高台の廟から眼下に広大な湖が見渡される（図 16）。

図 16 台中の文武廟

また、台中部のさらに内陸部には南北に阿里山山脈の阿里山森林区と玉山山脈が走っており、そこには富士山より高い主峰・玉山（3,952m）がある。

台南の高雄では蓮池潭（左営）という淡水湖があり、龍虎塔といって、龍から入り虎から出れば罪が浄化されるといういわれのある塔が建つ（図 17）.

図 17
高雄の
龍虎塔

台湾は緯度的には中部の花蓮（北緯 24 度）より南で玉山を北回帰線がとおり、熱帯と亜熱帯の境界となる。花東海岸近くに、大きなモニュメント（図 18）がある。台湾周遊の旅の最後が台東の花蓮である。この都市は山岳の太魯閣（たろこ）渓谷から切り出された大理石の街としても有名である。なお、貴重な文化や自然のある台湾に世界文化遺産のないことは、中国との関係で国連やユネスコに加盟のないことを考えれば残念である。

図 18 北回帰線標塔

韓国（大韓民国）

韓国への入国は､大分からは首都ソウル空路（現在、コロナ運休）が便利であるが、南部地区の探訪には釜山への海航路もある。ソウルへの訪問は、市内の大きな三星ソウル病院（サムソンソウルメディカルセンター）での招聘講演（リンパ浮腫関連）によるもので、学術交流として有益であった。釜山への上陸は海路で、近年大きく発展し歴史ある釜山港（図 19）まで約 3 時間 40 分である。なお、先年の韓国の南部地区都市の訪問の一部は、先の当 HP 掲載「サンショウオと里山歩き」（加藤征治、2022・5）に記した。

図 19 発展する釜山港

特にお気に入りは、その後も訪れた慶州の世界文化遺産で、１つは新羅時代の仏教美術の精華を遺す『石窟庵と仏国寺』（図 20）、もう１つは「屋根のない博物館」といわれる史跡群『慶州歴史地区』である。

図 20 慶州、仏国寺の木像・木魚（上）と庭園（下）

慶州中心部で新羅王朝の王族の大規模な古墳群・「古墳公園」（図 21）がある。大小 20 余基の古墳が並んでいるが、奥にある「天馬塚」では多くの副葬品が展示されている。

図 21　慶州の古墳公園

慶州で印象的なことは、毎年４月恒例行事の慶州桜祭りである（図 22）。同時開催の日韓合同慶州マラソン・ウオーキング大会も人気であり、初めての参加で、広い大きな湖を取り囲むように咲く岸辺の満開の桜を眺めながら 10km コースを歩いた。

図 22 慶州の桜祭り

日本

日本の世界遺産登録数は 25 件（世界ランキング 11 位、2021）で、内訳は文化遺産 20 件、自然遺産５件である。詳細は以下である。

文化遺産：『法隆寺地域の仏教建造物』、『姫路城』、『古都京都の文化財』、『白川郷・五箇山の合唱造り集落』、『原爆ドーム*』、『厳島神社』、『古都奈良の文化財』、『日光の社寺』、『琉球王国のグスク及び関連遺』、『紀伊山地の霊場と参詣道』、『石見銀山遺跡とその文化的景観』、『平泉―仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群』、『富士山―信仰の対象と芸術の源泉』、『富岡製糸場と絹産業遺産群』、『明治日本の産業革命遺産製鉄・製鋼、造船、石炭産業』、『ル・コルビュジエの建築作品・近代建築運動への顕著な貢献』、『「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群』、『天草地方の潜伏キリシタン関連遺産』、『百舌鳥・古市古墳群-古代日本の墳墓群』、『北海道・北東北の縄文遺跡群』
（注．＊負の遺産）

自然遺産：『屋久島』、『白神池』、『知床』、『小笠原諸島』、『奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島』

ベトナム（ベトナム社会主義共和国）

ベトナムへは「ランタン祭り見学・ベトナム縦断６日間」と銘打ったツアーに一人参加し、南北に細長い国の北の首都ハノイから南のホーチミンまで駆け足でまわった。

福岡空港からベトナムの首都ハノイには、時差２時間で、実質５時間のフライトである。ベトナムの北部では、奇岩が海面から突き出る神秘的な『ハー・ロン湾』(図 23)とアジア最古のカルスト地帯が広がる『フォン・ニャ、ケ・バン国立公園』の２つがベトナムの世界自然遺産とされている。

図 23 『ハー・ロン湾』の昆虫が羽を広げたような帆掛け船と奇岩群

ハノイに比較的近いところで、「ティエンクン鍾乳洞」があり、様々な形の鍾乳石がライトアップされている（図 24）

図 24 ハノイの「テイエンクン鍾乳洞」の鍾乳石

また、ベェトナムの文化遺産としては、中部の『フェの建造物』、『古都ホイアン』、『ミー・ソン聖域』がある。『フエの建造物』は 1802 年にベトナムを統一しグエン朝を開いたグエン・フォック・アインがフェに遷都し、北京の紫禁城を手本に築いた王宮と陵墓である（図 25）。

図 25 王宮南側ある午門は生憎修理中で残念！

古都ホイアンは 16-18 世紀に国際貿易港として栄えた港町で、日本がご朱印船貿易の中継点としていたので、日本との関係も深い。その後中国人が移住したので、現在『古都ホイアン』では日本風の伝統家屋（図 26）が一部保存・公開されている。

図 26　古都ホイアンの街、建物の中に来遠橋（日本橋）、日本の墓地も残る

ホイアンの夜、街のランタン祭りでは、民族衣装のベトナム美人を拝見、思わず１枚をお願いした(図 27)。

図 27 ホイアンのランタン祭の夜

『ミー・ソン聖域』はヒンドゥーの神々を祭るテャンバ王国の聖地であり、レンガ建築の外壁にはヒンドゥー教の神々の姿が刻み込まれている（図 28)。ベトナム戦争で破壊された祠堂の修復が続けられている。ホーチミンはベトナム南部の商業都市で、フランス統治時代の面影を残す建造物が多く、人口も首都ハノイより多い。

図 28 『ミー・ソン聖域』の祠堂・建造物

カンボジア（カンボジア王国）

カンボジアと言えば誰もが知る唯一、最大のアンコール・ワット遺跡群『アンコール』（世界文化遺産）であろう。9 世紀初めから 15 世紀前半まで栄えたクメール王朝 600 年の栄華の跡で、遺跡群の代表がアンコール・ワットで 12 世紀前半に建てられたという(図 29)。その発見は約 170 年程度前の比較的新しいもので、発見まで密林の奥で長い間ねむり続けていたのである。

現在のシュリムアップ地域に残るクメール国の王都は、豊かな水の都で大農業地であった。規模は比較にはならないが、日本で言えば平城京の大和盆地に当たるようなもので、その中の東大寺がアンコール・ワットに相当するという見方もできる。アンコール・ワットは大宗教施設であると同時に都のシンボルであった。アンコール・ワットから遅れてアンコール・トム（大きな町）が建設され、その中心がバイヨン寺院である。創建されてから自然の力そのままに置かれた遺跡では、巨大に成長した樹木（スポアン、榕樹）はまるで血管のようにからまっている(図 29)。

図 29　アンコール・ワット（左上）、アンコール・トムのバイヨン寺院（左下）、塔に血管のように絡まる樹木（右）

また、バンテアイ・スレイ（「女の砦」の意）では、ほとんど赤色の砂岩で造られた彫の深い優美な彫刻・レリーフが多くあり、「クメール美術の最高峰」とか、「アンコール美術の至宝」ともいわれている(図 30)。それら多くの彫刻の中でも、「デヴァータ（神)」はその微笑みから、「東洋のモナリザ」と呼ばれている。ただ本像は絵画「モナ・リザ」のようにとりすました神秘的なものではなく、むしろクメール芸術の市民の微笑み（時として不機嫌さ）を示しており、庶民的な風情でつくられたとも考えられる。

図 30「東洋のモナ・リザ」（カンボジアの遺跡バンテアイ・スレイの彫刻（左）矢印の拡大部デヴァータ(神)（右）

タイ〈タイ王国〉

タイ観光も福岡から首都バンコクへのジェットスター・アジア航空直行便約５時間程度である。観光は華麗なる王宮や寺院の数々である。国際貿易都市として栄えた仏教王国の王都・『古都スコタイ』(13～15 世紀）や『古都アユタヤ』（14～18 世紀）はタイの世界文化遺産である。白壁に囲まれた威厳ある王宮は今も王室の重要な祭典が行われている。王宮の隣には通称エメラル寺院と呼ばれる金の装飾が華やかなワット・ブラ・ケオがある。また、日本人に馴染めの深い寺院としてワット・アルン（暁の寺）（図 31）がある。アルンところは「暁」と言う意味で、三島由紀夫の小説「暁の寺」で知られている。

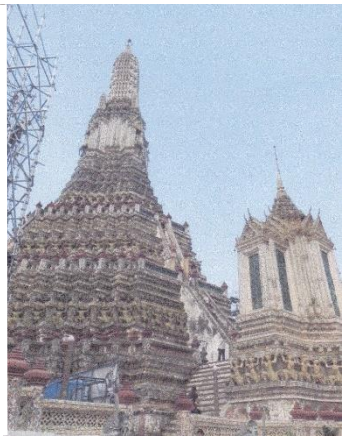

図 31　ワット・アルン（暁の寺)、前をチャオプラヤ川が流れ、急階段の塔を登ると街が見渡せる。

タイで最も古い歴史を持つ最高位のワット・ポー寺に大きな「涅槃像」(図 32)ある。全長 46m あり、近くで見ると像の足の裏の大きさにも圧倒される。

図 32 タイ、ワット・ポー寺の大きな「涅槃像」

なお、タイの中西部のミャンマーとの国境沿いに位置する希少な野生生物が生息する広大な森林地帯『トゥンヤイ、ファイ・カ・ケン生物保護区』や『ドン・パヤエン、カオ・ヤウ森林保護区』(共に世界自然遺産) があるが、いずれも一般観光はむりで、動植物の特別調査などに貴重な保護区である。

タイの多くの寺院の中で、ワット・プラ・マハタート寺院では木の根に埋め込まれた仏像(図 33)が有名である。これは残された仏頭はアユタカ王朝の後、僅か 15 年という短い年月で幕を閉じたトンプリ王朝の戦乱を語っていると言われている。

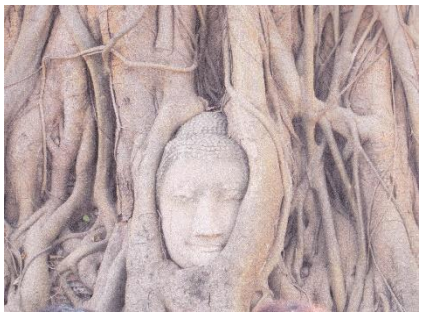

図 33 ワット・プラ・マハタート寺院の仏頭

以下、タイ風景アラカルト (図 34)

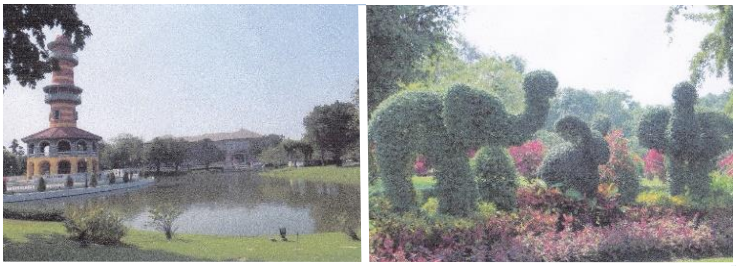

図 34 バンパイン離宮の庭園のアート (上)
タイ民族舞踊 (下左)
象の行列 (下右) と

マレーシア（マレーシア連邦立憲君主制国）

マレーシアは東南アジアに位置し、マレー半島南部（クアラルンプール）とボルネオ島北部（ブルネイ）の２つからなる国であるが、２つの世界自然遺産はいずれもボルネオ島にある。観光したのは２回、成田からクアランプール（約８時間フライト）、いずれもマレー半島の一部のみである。以下、図 34 を参考に語る。首都クアラルンプール市内には、KL センタータワーやペトロスツインタワーなど高層ビルが立ち並び発展してきている（図 35）

図 34 ある年のマレーシア観光（上）
新王宮と錫工場のジョッキ・モニュメント

図 35 首都クアラルンプールの発展：KL センタータワーやペトロスツインタワー(上)、シャーラム・ブルーモスク（下）

クアランプール市内の中心にある中国寺院「天后宮」(Thean Hou Temple、図36)は、縁結びのスポットとして中華系マーレーシア人のカップルに人気がある。

図 36 クアラルプールの中国寺院「天后宮」、
テンホー　てんごく？　干支ネズミ歳のお正月

クアランプールから北西へ車で約１時間半ぐらいの所にマラッカ海峡に流れ出るクアラ・セランゴールという河口の町がある。川のほとりのボート乗り場付近に夕方着いて、レストランで食事をしながら夕暮れ待つ。暗くなると 10 名ぐらいでボートに分乗してマングローブの木に無数に集まるホタルの光を鑑賞する。その瞬きは「熱帯のクリスマスツリー」と呼ばれるほど、常夏のマレーシアでは季節を問わずホタル鑑賞できる。現地のホタルは日本のホタル（ゲンジボタルなど）と比べて小さい種類であるが、その数が半端なく多い。写真が無いのが残念であるが、マレーシアのホタル鑑賞ツアーについて、JTB の海外観光ガイドに「クリスマスツリー」で美しい写真が掲載されている。なお、ホタル鑑賞スポットは、他にも１ヶ所コタキナバルというところから陸路２時間の所（テングザルの生息地付近）の川辺もある。

クアランプール南のデマラッカ海峡に面するマラッカには美しい海峡モスクがあり、街にはオランダ広場・教会がある。なお、マラッカは後述のジョージタウン・ペナン島と共に『マラッカ海峡の歴史都市群』として世界文化遺産に認定されている(図 37)。

図 37　マラッカ海峡モスク セントポールの丘（教会）、オランダ広場・教会と賑やかな飾りつけの三輪タクシー、

クアランプールの北約 150ｋｍの高原リゾートとして有名なキャメロンハイランド（図 38）がある。標高が 1,500m を越えるため、年間を通じて気温が 20℃前後なので涼しく快適である。

図 38　キャメロンハイランドのリゾートホテルと高原風景（紅茶畑）

キャメロンハイランドからさらに北西部のクアラカンサーにはまるでアラビアンナイトに出てきそうなマレーシアで一番美しいとされるイスラム寺院・ウブディアモスク（図 39）がある。

図 39　ウブディアモスク

マレーシア第二の都市ショージタウンからマラッカ海峡に位置するペナン島へ、小さな島であるが多彩な魅了があるリゾートアイランドである（図 40）。さらに、ペナン島よりバスで約１時間、大きな湖にある小島にあるブキッ・メラ・レイクタウンオラウータン保護島では、十数頭のオラウータン（マレー語で森の人）が保護・飼育されている。

図 40 ペナン島ペナンヒルからの眺望
ペナンヒルのお寺の仏像

シンガポール共和国

シンガポールはシンガポール島と 60 以上の小さな島からなる近年高度に都市化された国であり、市街地やセントーサ島など観光スポットである。ネパール、オーストラリアやニュージーランドなどへの旅の途中ハブ空港としてのシンガポール（チャンギ）国際空港での乗り換えは比較的多い（図 41)。

図 41 シンガポールの街の風景（右端マーライオン）

ネパール連邦民主共和国

図 42 蛇行するミャンマー河川上空（と思わしい）

ネパールへはかねてより世界最高峰のエベレスト（8848m，ネパール名でサガルマータ）などの山々を眺めてみたいと思っていたところで、「ネパール・ヒマラヤ絶景の旅８日間」という旅行会社の企画ツアーが目に留まり、一人参加した。旅程は福岡からシンガポール（泊）経由・首都カトマンドゥ往復である。空路はシンガポール発から、いわゆるインドシナ半島を北上し、ミャンマー上空を経て（図 42)、ネパールの首都カトマンズへ着く。

初日はヒマラヤ山脈の麓に広がる『カトマンズ盆地』（世界文化遺産）の街の中心のダルバール（王宮）広場やヒンズー教・仏教の木造建築寺院など見て回った（図 43)。なお、『カトマンズ盆地』は、ネパール、パタン、バクタブルの３つの都市からなっている。

図 43　カトマンドゥの街のネパール最古の仏教寺院（左）、ダルバール広場（中）、シヴァ・バールヴァティー寺院（右）

首都カトマンズに入り、翌朝さっそくカトマンズ空港からのヒマラヤ遊覧飛行に同乗し機上から目の前に迫るヒマラヤの山々を楽しむ。その後、ヒマラヤの展望台と言われるナガルコットへ行キ、夕日のヒマラヤの景色を楽しむ（図 44）。

図 44　ネパール・ヒマラヤの山々、ポカラから見える山々（左下）、遊覧飛行で撮った写真（右上）、ナガルコットのホテルからの夕日に輝く山々（右下）

カトマンズから西へ約 200km の中央ネパールのポカラへ向かい、フェワ湖から遠くマチャプチャレ(6993m)を見る。さらに、早朝からヒマラヤの展望台として人気のサランコットの丘（1592m）へ上がり、毛布を蒔いて朝の寒さに耐えながら、マチャプチャレ(6993m)の雄姿を撮り続けた（図 45）

図 45 サランコットの丘から眺めるマチャプチャレの雄姿

また、ポカラでは国際山岳博物館（図 46）を訪ね、登山、地質、動植物、民族・文化、環境などを含めて、ヒマラヤ登山の歴史を知る。日本人として、とくに女性としてエレヴェスト初登頂の田部井淳子氏の記録は興味深い。

図 46　ポカラの国際山岳博物館、ヒマラヤ登山史を記録(左)
ネパールビールのラベル（右）

スリランカ（スリランカ民主社会主義共和国）

スリランカは旧国名セイロンで、古い日本人ではセイロン紅茶で馴染みある。福岡からハブ空港のソウル経由で首都コロンボへ向かつた。国土は北海道の約８割程度であるが、“インド洋の真珠“と言われる緑豊かな熱帯の島で、世界文化遺産６つ、自然遺産が１つある。

有名なのが巨大な岩山を中心に築かれた都城『古代都市シーギリア』である。後述する中央オーストラリアのウルル（エヤーズ・ロック）ほど大規模のものではないが、急傾斜階段の直登はかなりきつい。当時、頂上に王宮と貯水池があったことは極めて珍しい。岩山の北側の王宮への城門がライオンをかたどって築かれたため、「シーハ（ライオン）ギリ山」、後に「シーギリヤ」と呼ばれるようになった。岩山の壁には多くの天女像「シーギリヤ・レディー」（図 47）が描かれている。

図 47　スリランカ・シ-ギリヤロック（矢印は登頂した人達）、ライオンテラス城門
壁画シーギリヤ・レデイー

スリランカの高地に位置する『聖地キャンディ』（世界文化遺産）は仏陀の犬歯を祀る仏歯寺（ダラダーマーリガーワ寺院）があり、ここはシンハラ朝最後の都で文化遺産となっている。シンハラ朝の第２の『古代都市ボロンナルワ』（世界文化遺産）（図 48）は 12 世紀後半に最盛期を迎え、中世スリランカ美術が開花した仏教都市である。『ダンブッラの黄金寺院』もスリランカ最大の仏教石窟寺院（図 49）である。

図 48　スリランカ・『古代都市ボロンナルワ』遺跡、右図矢印はムーンストーン（輪廻）

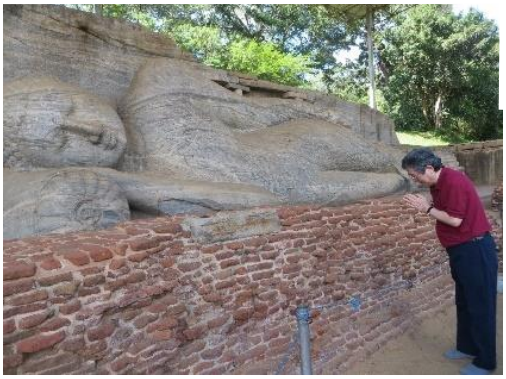

図 49 黄金寺院（石窟）右

スリランカと言えば、人気なのはスリランカ（セイロン）ゾウである。アフリカゾウよりやや小さめである。“象使い”という仕事があるくらいスリランカ人にとってはとても身近な動物である（図 50）。

図 50　スリランカの象たちと大きな糞